

鳶がクルリと

2005(平成17)年8月24日鑑賞(東映試写室)



監督= 藪田賢次 / 原作= ヒキタクニオ / 出演= 観月ありさ / 風吹ジュン / 哀川翔 / 宇津井健 / 塩見三省 / 須藤元氣 / 品川祐 / 庄司智春 / 杉浦太雄 / 通山愛里 (東映配給 / 2005年日本映画 / 118分)

……エリートOLの貴奈子が命ぜられたのは、巨大モニュメント設置のため「日本晴れ」の鳶職人たちと交渉すること。一体なぜ、私が……？『ナースのお仕事』に続いて観月ありさがコミカルな演技に挑戦だが、この映画の見どころは、ちょっと異様な鳶職人たちの世界(?)の他、貴奈子の女ながらの仕事への執念と長く美しいおみ足……？『釣りバカ日誌』と同じように、気分転換としてたまにはこういう映画も……。

エリートOLも大変！

この映画の主人公中野貴奈子(観月ありさ)は、大企業であるG&B社の入社6年目のOLだが、開発プロジェクトに配属され子供服の開発に励んでいる。そして、プレゼン能力や通訳能力など、その仕事上の能力は自他共に認めるもの……。しかし、エリートOLになるためにはやはり姿カタチも重要。いつも一流ブランドの服を見事に着こなしているが、その最大の魅力は長く美しいおみ足。私の大好きな風吹ジュンが扮するG&B社の社長飯野圭子も服装のセンスは抜群だが、2人並ぶとやはりそのスタイルには大きな差が……。しかし仕事に頑張る他に、これだけ女を磨くことに投資するのは、時間的にも費用的にもチョー大変……。

貴奈子の選択その1

子供服の開発プロジェクトの有能な人材であった貴奈子が、ある日突然飯野社長から命ぜられたのは、全く畑違いの巨大モニュメント設置チームへの配置換え。

「なぜ私が……？」「そんな仕事やっつけられないよ！」と貴奈子はチーム長に宣言したが、彼の説明によると、鳶職人との交渉をまとめ無事モニュメント設置が完了すれば、もとの開発チームにいい立場で戻れるとのこと。さて貴奈子の選択は……？

貴奈子の選択その2

貴奈子が最初に訪れた鳶集団は、最大の組織を誇るものの、その会長は完全な変態オヤジ……？ その会長の変な趣味を理解したうえで飯野社長やチーム長が貴奈子を責任者に据えたとすれば、大した人事……？

完全に会長の趣味に合致した貴奈子は、会長から「ボクの頼みを聞いてくれたら仕事はオーケー」と言われたため、喜んで「その頼みとは？」と突っ込んだが、さてその頼みとは……？ それは「その長い足で、そしてそのハイヒールでボクを踏んづけてくれ」というもの。さてそう言われた貴奈子はどうするの……？

貴奈子の選択その3

貴奈子は常日頃から女を磨いているだけあって、仕事上の能力だけではなく、服装から身のこなしまで抜群。30歳を前にして彼氏の1人や2人いても当然だが、貴奈子の彼氏は何と重役の息子。そんな彼氏からついにデッカイ指輪とともに結婚話を切り出されたのは、「日本晴れ」との交渉に頭がイッパイの時。さて貴奈子の選択は……？

「日本晴れ」の幹部たち

鳶集団「日本晴れ」の鳶頭は石坂勇介（塩見三省）で、ご隠居が池谷定吉（宇津井健）。そして隼と呼ばれる鳶職人の司令塔を勤めるのは高松悦治（哀川翔）。悦治は1年6カ月の「おつとめ」を終えて帰ってきたところだが、みんなの信頼は抜群。この3人の幹部たちの背中には一面の彫り物があるが、彼らは決してヤクザではなく、鳶の仕事に誇りを持ったホンモノの職人たち。すると、このような幹部の下にいる職人たちは……？

幹部が一流なら部下も一流……かどうかよくわからないが、とにかく個性だけは豊か。奥村風太（庄司智春）と奥村雷太（品川祐）はケツタイな軍事オタクで、

尾関剛（須藤元気）は、腕はピカイチだが、全てを学歴で表現してしまうヘンなヤツ。もっとも豊田健次（杉浦太雄）はヤンキーあがりの職人見習いで、茶髪だが一人前の鳶職人を目指して必死だし、悦治の娘の高松ツミ（通山愛里）もまじめに一生懸命よく働いている。現実にはスクリーン上に描かれる高層ビルの現場での仕事ぶりをみても、チームワークよくいい仕事をしている様子がありありと……。

オレにはとてもムリだが貴奈子は……？

鳶職は高いところで仕事をするのが宿命だから、最も適性がないのは「高所恐怖症」の人間。私は5階建てビルの屋上から下を見ても気持ちが悪くなる程の高所恐怖症だから、とても鳶職人はムリ。貴奈子は「日本晴れ」の仕事ぶりを見ておこうと高層ビルの建設現場の上までお弁当をもって気楽に上って行ったが……？

私の観月ありさ論

私はテレビドラマをほとんど観ない（観るヒマがない）から、テレビドラマの主演が多い観月ありさをほとんど観たことがない。また映画でも「お笑い系」はわざわざ観に行かないので、彼女の代表作である『ナースのお仕事』も観たことがない。そんなワケで観月ありさという女優の顔と名前はよく知っていても、あまり印象に残っていない女優の1人だった。そしてたしかに美人顔なのだろうが、予告編などで観ても、私の印象ではちょっと太め……？ 背が高く、足が長く、姿勢がよく、スタイル抜群なことは認めるが、やはり女は顔……。コミカルな演技に自分の持ち味を見出したのは立派な選択かもしれないが、別の言い方をすれば、それはその路線しか通用しないということかも……？

目下私が注目している超美人女優は何といても『海猫』（04年）の伊東美咲だが、8月22日に観た『この胸いっぱいのお愛を』ではミムラも新しい役柄に体あたりの挑戦をしていた。こんな女優たちを見ていると、観月ありさのコミカル路線一辺倒（？）はちょっと安易すぎるのでは……？ ホンモノの観月ありさも30歳直前の「女の分岐点」にあることはたしか！ スタイルの良さだけに頼ることなく、女優としてホンモノの女をもっと磨かなければ……？

2005(平成17)年8月25日記